

星はらはらと

第二回

太田 治子



——二葉亭四迷の明治——

サンクトペテルブルグが近付くにつれて、先程のモスクワの駅のホームがなつかしく思い出されてきた。改札のチェックが厳しかったことが嘘のように、特急サブサン号を待つホームは明るかった。真昼の日の光がまぶしく降り注ぐホームに、たくさん雀が舞い下りていた。日本の雀に比べて全体の色が淡くベージュがかっていて、目の色までも薄く感じられた。こちらが近付いていっても逃げたりしないばかりか、むしろ何か話しかけてくるような気がした。けさ、モスクワのホテルの前の広場で

みかけた雀もそうだった。空港に近い広大なオリンピック会場跡に立ち並ぶB級ホテルのひとつに、昨夜は泊まったのである。ホテルのロビーで大男のガードマンが見張りをしているのには少し緊張したものの、朝食のピュッフェはおいしかった。ボルシチを、三杯もおかわりした。新宿のレストランで食べたのと同じトマト味だった。それにしても、駅のホームにいる雀たちの数は多かった。鳩が棲みつく駅は、日本にも多い。しかし雀が根城にしている駅は、大都會にはあまりないような気がした。

モスクワは、一泊泊まっただけだった。どこもみていない。駅の周辺は埃っぽく、車も渋滞していた。とりとめもなく、大きな街に思われた。

「もう三十分とたたないうちに、ペテルブルグのモスクワ駅に着きます。サブサン号を始めとしてモスクワ行き

にて自業自得といふべきものか、此形勢は今後如何に推移すへきか高見如何」ペテルブルグに到着する前の「入露記」の中に、二葉亭はこのように書いていた。何だかいかにも日和見主義的に思われる。しかし二葉亭が時の皇帝ニコライ二世へ向ける鋭いまなざしは、まだロシアに足を踏み入れる前から徹底していた。

同行の藻利佳彦さんが、そのように教えて下さった。ロシアの鉄道の駅はおよそ、行先がその名前になっている。モスクワには、それぞれ行先別に九つの駅がある。一方サンクトペテルブルグの駅は、五つだという。おやと思ったのは、サンクトペテルブルグ行きの駅は、今もソビエト時代のままのレニングラード駅だということだった。レーニンの街という意味のこの名前が、まだ駅にはそのまま残っている。レーニン像が引き倒された一方では、今もレーニンを大切に思う人たちが根強くいるということなのだろうか。二葉亭四迷が明治四十一年（一九〇八）年ロシアへ旅立つ前後の日記に、まだレーニンの名前はでてこない。

「革命騒動は鎮定したる観あり、これ政府の政策其圖に中りたるが爲か、はた革命黨其物の要求が餘り突飛にして到底實行すべからざるものなるか故に自滅したるもの

「……現実の世界を知らず、國情を曉らず、民情に通ぜず、政治上社交上の教化は一も享くる所なく、精神界實界の消息には一も通ずる所なくして、唯纔に時々劇場に臨むに由りて、進歩せる階級の情状の一斑を髮髯するのみ……（中略）……數々國內を巡狩すれども、護衛の兵士の取圍める隙間より表面の晴がましき露西亞を望見するのみにして、其の裏面を知らず。……（中略）……吾人は遂にニコライ二世の如き者を得て之にて満足せざるべからざるなり。」

血の日曜日事件から半年後の明治三十八（一九〇五）年六月十九日に、書かれたものである。二葉亭四迷は、日露戦争の戦後処理で日本側を齒しりさせたウィットのことをかなり評価していた。一月の血の日曜日事件に続き、その年の十月に起きた全ロシアの鉄道ストライキが、やがて市街戦へと発展した。その中で事実上の首

おた・はるこ●1947年生まれ。近著に『石の花 林芙美子の真実』『時こそ今は』（ともに筑摩書房）、『明るい方へ 父・太宰治と母・太田静子』『夢さめみれば 日本近代洋画の父・浅井忠』（ともに朝日新聞出版）など。